被災体験

蒲池富子（日の出・59歳）

忘れもしません昭和二十年八月八日午前十一時頃、私は学校防衛団の任務を終え、交代のため我が家にかえる途中、八幡警察署（中央町）のあたりで米軍の焼夷弾攻げきに会いました。

その頃我が家は北九州市に在住しており、私は旧制県立八幡高等女学校の三年生で十六才の時でした。

すごい爆音がしたので私は近くのビルに逃げこみました。

ビルの中は避難の人がいっぱいで、ひよっと横を見るとカーキー色の作業服を着たおじさんの手の甲はぐちゃぐちゃで血まみれでした。私はアッと言ったまま余りのすごさに声が出ませんでした。

ビルの中では凄い物音や、やける臭いが立ちこめて二十分位して外に出るとあたり一面、焼野カ原で白いけむりが立ちこめていました。近くの家は焼けてくすぶりつづけよく見ると家屋の焼けた中に人も死んでいました。

焼夷弾を落としたあと雨が降ったらしく道路や家の焼けたあともぬれていました。

私は焼けた建物のくすぶりを抜けてようやく家に辿りついたのは午後二時頃でした。私の家の一郭は残っておりましたが家から下は全部焼野カ原です。

小伊藤山の横穴の防空壕は印刷所の人が入口に油をおいていたため火が油にもえ移り、防空壕の中は煙で充満し蒸しやきになって窒息し全員死んだとの事でした。

祖父、祖母、母は私がかえって来たのでみんなで喜びあいました。

然し弟が自転車で出たままかえっていず、不安な時間をすごしていましたが一時間位して歩いてかえって来た時、家族全員無事でよかったと思いました。

この八月八日の空しゅうは全身をせん律させる様な打げきでした。

それ迄、昼となく夜となく警戒警報、空襲警報とサイレンが鳴っていましたが他人事のように思っていました。

その後一週間位して大事な天皇陛下の放送があるからという事で皆でお隣にラジオをききに行きました。

子供心になんの放送なのか皆目見当がつきませんでした。

軍国主義、武運長久、鬼畜米英撃滅という言葉しか知らなかった私は、あのような悲惨な空撃をうけてさえ絶対に勝つと信じこんでいたのです。

天皇陛下の放送も古いラジオでは、はっきりとききとれず、母や祖父母は戦争は敗けたのだという事でした。

然し、米麦、さとう、しょうゆ等は戦時中のままの配給でとても家族五人たべる程なくおかゆの中に南瓜を入れたり、さつまいもを入れたり、田

舎に買い出しにいったりしてしのいでいました。

私たちは高等女学校二年の半ば頃から学徒動員で八幡製鉄所の構内に仕事にいっていましたが、もうそれもなくなり学校に戻る事が出来ました。

ふり返りますと、昭和二十二年春に県立八幡高女を卒業し早や四十二年の年月がすぎました。

近頃、クラス会、錦陵会と同窓会のハガキがまい込み、四十二年立った今でもあの当時の事はなつかしく思い出しています。

当時、学生の私でさえ、軍国主義一色にそめられ、それを信じこんでいた事により敗戦の現実、後でわかった事ですが戦争のために国民が如何に犠牲にさせられたかと思うと再びこの呪わしい戦争をくり返してはならない。そのためにこの過ちを再びくり返さないため戦争を直接知らない世代へ如何に戦争が反価値であり、悲惨であるか、人類にとって一人一人の人間性の尊厳を認める正しい思想が必要であるか、又人間文化の根底になる正しい宗教が必要であるかを一婦人として又戦争体験者として叫び、世界平和を目指して邁進して行きたいと思います。

